令和6年 8月1日（毎月1日発行）　赤十字新聞　第1011号　昭和24年9月30日　第三種郵便物認可

赤十字NEWS 8

AUGUST.2024.#1011

Japanese Red Cross Society NEWS

特集｜▶P.2

救（すく）い護（まも）る人を育てる
日赤の看護師養成

看護学生によるキャンドルサービス
（ナイチンゲール記章授与式にて）

CONTENTS

TOPICS

「能登半島地震から半年」
赤十字の支援と被災地での活動リポート …… P. 4-5

連載

未来を守る防災ゼミナール …… P. 4
献血ハートフルストーリー …… P. 5

AREA NEWS

［ 東海北陸 ］ 楽しく学ぶ「血育かるた」で子どもたちに向けた献血啓発活動
［ 東京 ］ 映画『じょっぱり-看護の人 花田ミキ』五十嵐匠監督が赤十字情報プラザ来訪
［ 全国 ］ 生きるために逃げるしかなかった「世界難民の日」／他 …… P. 6-7

WORLD NEWS

ゾドで苦しむ人々を救うために …… P. 8

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒 105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部 20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

R100
古紙パルプ配合率100％再生紙を使用

VEGETABLE OIL INK
環境にやさしい植物油インキを使用しています

SPECIAL FEATURE | 特集

救（すく）い護（まも）る人を育てる

日赤の看護師養成

日赤は134年前に、戦争や災害から命を救う救護員（看護師）の養成を始め、現在では、9校の看護専門学校と6校の看護大学が、その使命を引き継いでいます。今号では、看護師になるべく日々研鑽している3人の学生にお話を伺いました。

赤十字の理念

戦争などによる傷病者を
敵味方の区別なく救う、が原点
「人道の実現」

ココが違う！日赤の看護師養成

赤十字病院の看護師は、災害時に救護員*として活動します。そのため、日赤の看護専門学校・看護大学では、通常の看護教育に加え、さまざまな授業の中で、赤十字の理念を理解し、災害にも対応できる知識・技術を学んでいます。その指導にあたる教員の多くが、実際の災害で救護活動の経験を持つ赤十字看護師です。また、赤十字看護師として海外の赤十字活動や人道支援に参加する役割もあるため、語学や国際理解の学習にも力を入れています。

＊病院勤務3年以上で、災害看護の専門教育を受けた者が救護員に登録される

国内災害救護

災害時には医療救護班、
こころのケア班として活動

国際活動

国際赤十字と連携し、
海外の紛争や災害で
苦しむ人々のために活動

ここでご紹介できなかった
看護学生のエピソードは
赤十字NEWSオンライン版で！

Future Nurses 1

助ける人も、助かる人も増える「人道」という考えを広めたい

大津赤十字看護専門学校 3年
鳥本（とりもと） 実花（みか）さん

学校で聴診器を使った演習を行う鳥本さん（右）

大切な人を助けられなかった…その後悔と申し訳なさが、看護師を目指すきっかけになりました。

私が中学生のときでした。その日、祖母だけが家に残り家族4人はそれぞれ外出していました。夕方、私が帰宅すると、浴室に灯りが。しばらく時間がたち、気になって様子を見にいくと、祖母が浴室で倒れていました。慌てて両親を呼び、救急車が到着するまでの間、懸命に心肺蘇生をする両親を見守ることしかできませんでした。共働きで出勤が早い両親の代わりに、毎朝起こしてくれた祖母。学校から帰ると、おかえりと言ってくれるのも祖母でした。倒れている祖母に何もできなかった、その悔しさと申し訳なさを、人の役に立つことで返していきたいと思うようになりました。

「自分にできること」を探して臓器提供の意思表示カードの存在を知りましたが、今、健康なうちに力になれることをと考えてたどり着いたのが、献血でした。高校生になって献血ルームに通うようになり、そこで働く人や献血をする人たちの「誰かのために」という思いであふれている献血ルームが大好きになりました。同時に、緊張している私に優しく対応をしてくださる看護師さんに憧れ、仕事として毎日献血に貢献できる献血ルームの看護師になろう、と看護専門学校に入学しました。

赤十字の看護専門学校に入学してよかったこと。それは、自分と同じように「誰かのために」という気持ちを持っている仲間と出会えたことです。高校のころは、献血をすることに対して、周りから「痛くない?」と不思議がられることが多く、献血のことを話すのをためらうようになりました。しかしこの学校では献血に行く話題がよく出ます。実習先のドクターも頻ぱんに献血に行っているし、私が献血行こうかな、とつぶやくだけで「私も行きたい！」と言ってくれる仲間がいます。

実習先が大津赤十字病院であることも、この学校の利点です。先生が同病院の看護師なので、実習でのことを質問しやすいです。実習では、自信をなくし、看護師に向いていないかもしれないと落ち込むこともありますが、術後につらそうにしていた患者さんが回復していく様子を見るうちに、人の回復に関われる看護師の仕事の素晴らしさを知りました。最初は献血ルームで働きたいという思いから目指した看護の道でしたが、今では、個々の事情を抱えた患者さんと関わることができる病院看護師の仕事に魅力を感じています。

赤十字の学校に入るまで、「人道」とは何かを考えたことはありませんでした。人を自然に思い合える空気の中で「人道」について学ぶことにより、気づきや行動が変わりました。**人道の精神をもって患者さん一人一人と向き合う看護をすることで私自身も「人道」を広める一端を担えるのでは**、と思っています。少しずつでもこの考え方が広まり、助ける人も、助けられる人も増えて、思いやりがあふれる社会になることを願っています。

Future Nurses 2

人が人を救えるように働きかけている組織。看護の他にも、大切なことを学んでいます

長岡赤十字看護専門学校 2年
島村（しまむら） 那優（なゆ）さん

共に学ぶ友人と、授業の資料に目を通す島村さん（右）

赤十字の看護学校を選んだきっかけは、中学のときの総合学習です。地元で起きた新潟中越地震を調べる中で、災害時の赤十字看護師の活動を知りました。高校で進学先を選ぶ段階になって、改めて赤十字について理解を深め、その災害への対応に魅力を感じ、赤十字看護専門学校を志望しました。また、入学してから、日赤新潟県支部に見学に行った際、災害対応の拠点になることを想定して通常の1.5倍の耐震構造で建てられていたり、天井が落ちても人的被害を最小限に抑えるために軽量な素材を使用したりと、災害への備えを徹底していることを知り、とても感銘を受けました。

赤十字の看護学校は「人道」を教育理念に掲げていて、3年間みっちりと赤十字の人道や「災害看護学」などの指導を受けます。私は2年生で、まだ学んで1年と少しですが、もうすでに、ここで学ぶことは看護師としてだけでなく人としても大切なことばかりだと感じています。例えば、1年生の最後にあった病院での実習でのこと。目標は「患者さんを理解すること」でしたが、患者さんとどうコミュニケーションを取ればいいのか悩みました。でも頭を切り替え、自ら病室に行って患者さんとコミュニケーションをとるうちに、カルテの情報だけでは足りなかった部分が見え、患者さんへの理解を深めることができました。このように行動に移せたのは、入学後すぐに参加した赤十字トレーニングセンターでの学びが生かされています。看護師にとって大切な能力は、まず気づくこと、そして相手を見て深く考え、実際に行動することだと実感しました。

医療や看護の他にも、救急法や水上安全法などの**講習によって市民による救命率を向上させようとしているところにも魅力を感じます。知ることで誰かを救える、救われた人も早く手当てしてもらったことで回復が早くなる**。献血の事業もそうですが、人が人を救えるように働きかけている組織というのは、この社会に必要不可欠です。私も看護師としてその社会活動に参加し、貢献していきたいです。

Future Nurses 3

災害看護を究めたくて選んだ学校で、看護師の役目は「苦しみを和らげること」と知った

京都第二赤十字看護専門学校 2年
内田（うちだ） 昌孝（まさたか）さん

車椅子への移乗演習をする内田さん（右）

母が看護師ということもあり、小学校低学年のころから医療職に興味がありました。最初に憧れたのは、救急救命士。その後看護師に目標が変わったのは、東日本大震災での日赤の救護活動を知ったからです。

私は小学4年生から中学3年生まで地元の合唱団に所属し、高校からは水泳部の練習に打ち込む一方、合唱団OBで結成した『合唱団Youth』の代表をしています。その活動の中で、東日本大震災の被災地に義援金と歌を届けるというイベントがあり、その際に震災の伝承館で日赤の救護活動を映像で視聴。衝撃を受けました。自分も災害看護、災害医療を学びたいと強く思ったのです。

看護の大学や専門学校はさまざまありますが、災害看護・災害医療について深く学ぶことができる赤十字の専門学校を選びました。災害に備えた総合演習では、実際の災害現場を想定し、傷病者役、救助者役に分かれて実践的な演習を行います。講義を受けていく中でも、日赤救護班でありDMAT（災害派遣医療チーム）でもある医師や認定看護師*の方から、実際の災害現場での救護の体験談を聞くことができます。先日の能登半島地震の際も、看護師でもある担任の先生が救護員として被災地に出向き、帰校して、被災者に寄り添った「こころのケア」の大切さを教えてくれました。こうした学びを通して、看護師は医療を提供するだけでなく「苦しみを和らげる役目」があるのだと知りました。今、自分の目標もDMATや救急看護、小児救急の資格を取りたいと大きく広がっています。赤十字の学校で学ばなければこのような目標を持たなかったかもしれない、入学して本当によかった、と実感しています。

赤十字は世界にネットワークが広がっていて、紛争が続く地でも、赤十字の理念に則り、中立な立場で敵味方の区別なく救護に当たっています。私は、そんな赤十字の姿勢にとても感銘を受けています。国内医療に関しても、へき地医療拠点を作り、医師の確保が困難な山間部や離島を巡回し、地域住民の診療や健康診断を行い、病気の予防と早期発見に努めるほか、エイズ治療、被爆者治療、緩和ケアなど、あらゆる病気や苦痛に対応できる組織が備わっています。私も、**どんな環境下でも分け隔てのない看護で、その方の苦痛を少しでも和らげられるよう、精神もスキルも磨いていきたい**です。

＊特定の分野において、熟練した技術・知識を有する者として認定された看護師。例：「感染管理認定看護師」など

日赤の看護師ヒストリー

- 1886年 博愛社病院設立 ❶
- 1890年 看護師養成を開始 ❶
- 1891年 濃尾大地震 ❷
- 1914年 1914年ごろの看護帽・看護衣 ❷
- 第一次世界大戦
- 1918年 戦地に派遣された女性救護員の制服（現在も式典で着用）
- 1923年 関東大震災 ❸
- 1939年 第二次世界大戦 ❹
- 1945年 広島、長崎に原爆投下 ❺
- 1985年 日本航空123便墜落事故 ❻
- 1995年 阪神・淡路大震災 ❼
- 2004年 新潟県中越地震 ❽
- 2011年 東日本大震災 ❾

「救い護る人」を世に送り続けて

❶救護員（看護師）養成のために病院設立
❷養成看護師による初の災害救護
❸日赤は193の救護所を設け被災者を救護
❹看護師養成を加速させ海外戦地に延べ3万3156人を派遣
❺被爆地の赤十字病院に患者殺到、被災した看護師・看護を学ぶ生徒らも救護に尽力
❻損傷のひどい遺体を生前の姿に近づけて整復する「整体」を実施
❼全国から救護員延べ6000人を派遣
❽「こころのケア」を本格的に展開
❾発災から半年にわたり過去最大規模の救護活動を展開

TOPICS

1 TOPICS 「能登半島地震から半年」 赤十字の支援と被災地での活動リポート

今年元日に発生した能登半島地震。住家被害は12万棟を超え（7/1現在、消防庁情報）、多くの方が避難所生活を余儀なくされました。日赤では、発災当初より全国から救護班や日赤災害医療コーディネートチーム、こころのケア班などを派遣したほか、多くの赤十字ボランティアたちが活動し、また、避難生活を支える多様な救援物資の支援を行いました。今回は7月1日までの半年間の活動の概要をお伝えします。

避難所を巡回し、血圧を計りながら避難者の健康状態の聞き取りをする日赤救護班の医師

日赤の主な活動状況（5月7日時点）

［職員派遣］
- 救護班：延べ **290班** を派遣
- 日赤災害医療コーディネートチーム：延べ **120チーム** を派遣
- こころのケア班：延べ **44班** を派遣
- 支部支援要員：**68人** を派遣

［ボランティアの活動］
- 赤十字ボランティア：延べ **1709人** が活動

［救援物資の配布］
- 毛布：**1万6005枚**
- 安眠セット：**5230セット**
- 緊急セット：**2224セット**
- その他：**携帯型簡易トイレ 3400個 など**

※数は5月7日までの集計。日赤の救護体制は5月3日をもって全て解除

断水が続く地域で屋外シャワーなどを設置、設備の使用方法を説明する日赤職員

みぞれや雪が降る中、屋外に救護班の宿泊テントを設営。被災地に負担をかけない自己完結型の支援を徹底

全国から能登半島に日赤救護班が集結！

全国の病院から救護班を派遣
※日赤支部名（病院名）

❶本社（日赤医療センター）❷北海道支部（旭川、伊達、釧路、北見、栗山、浦河、小清水、置戸、函館、清水）❸青森県支部（八戸）❹岩手県支部（盛岡）❺宮城県支部（仙台、石巻）❻秋田県支部（秋田）❼山形県支部（委託病院）❽福島県支部（福島）❾茨城県支部（水戸、古河）❿栃木県支部（芳賀、那須、足利）⓫群馬県支部（前橋、原町）⓬埼玉県支部（さいたま、小川、深谷）⓭千葉県支部（成田）⓮東京都支部（武蔵野、大森、東京かつしか赤十字母子医療センター）⓯神奈川県支部（横浜市立みなと、秦野、相模原）⓰新潟県支部（長岡）⓱山梨県支部（山梨）⓲富山県支部（富山）⓳石川県支部（金沢）⓴福井県支部（福井）㉑長野県支部（長野、諏訪、安曇野、川西、飯山、下伊那）㉒岐阜県支部（高山、岐阜）㉓静岡県支部（静岡、浜松、引佐、伊豆、裾野）㉔愛知県支部（愛知医療センター名古屋第一、愛知医療センター名古屋第二）㉕三重県支部（伊勢）㉖滋賀県支部（大津、長浜）㉗京都府支部（京都第一、京都第二、舞鶴）㉘大阪府支部（大阪、高槻）㉙兵庫県支部（姫路、神戸、多可）㉚奈良県支部（委託病院）㉛和歌山県支部（和歌山医療センター）㉜鳥取県支部（鳥取）㉝島根県支部（松江、益田）㉞岡山県支部（岡山）㉟広島県支部（原爆、庄原、三原）㊱山口県支部（山口、小野田）㊲徳島県支部（徳島、ひのみね医療療育センター）㊳香川県支部（高松）㊴愛媛県支部（松山）㊵高知県支部（高知）㊶福岡県支部（福岡、今津）㊷佐賀県支部（唐津）㊸長崎県支部（長崎原爆）㊹熊本県支部（熊本）㊺大分県支部（大分）㊻宮崎県支部（委託病院）㊼鹿児島県支部（鹿児島）㊽沖縄県支部（沖縄）

被災地で活動した赤十字ボランティア

令和6年能登半島地震では、延べ1709人の赤十字ボランティアが支援に携わりました（5月7日時点）。その活動内容は、救援物資の搬送や炊き出し、避難所を巡っての整体やマッサージ、リラクゼーションなど多岐にわたり、また、季節の変化とともに熱中症予防の啓発活動、仮設住宅のコミュニティ形成にもつながるグリーンカーテン作りなど、長期化する避難生活において、被災者の健康を維持し、目には見えないストレスをケアする取り組みも実施しています。平時から地域に根差した活動を続け、人々が本当に求める支援と向き合う赤十字ボランティアだからこそ可能な支援が行われています。

石川県内ボランティアの活動

七尾市矢田郷の避難所では、石川県赤十字安全法奉仕団・北陸大学学生赤十字奉仕団らによる**足湯・手浴・ハンドケア**が行われた。**〈写真左〉**安全法奉仕団によるハンドケアと足湯。幼児を連れたお母さんもひと時リラックス。**〈上の写真〉**石川県柔道整復師会赤十字奉仕団は、発災から1カ月で延べ80人を超える奉仕団員が被災者をケア

県外から駆けつけたボランティア

神奈川県支部から派遣された医療救護班、8班すべてに救護・無線救急・山岳のいずれかから奉仕団員1人が帯同し、日赤の救護活動を裏方でサポートした。写真は避難所で段ボールベッドを組み立てる神奈川県山岳赤十字奉仕団の団員（右側）

志賀町では香川県レスキューサポートバイク赤十字奉仕団が地元のバイク仲間にも呼びかけて炊き出しを実施

珠洲市では、埼玉県赤十字救護ボランティアが日赤の救護活動に使用した大型テントの撤収作業をサポート

vol.5 未来を守る 防災ゼミナール

日赤の**災害救護研究所**の専門家の視点から、災害時に必要な知識や今から始められる防災など、役立つ情報を発信します。

災害救護研究所とは？
日本赤十字看護大学付属の研究機関として2021年に発足。災害時の救護活動を通して得た知見を学術的に分析・集約し、被災者の苦痛の予防・軽減を目的とした研究所。

今回のテーマ

探さない、安心して早く逃げるために 命を救う「仕組み」を日常に

今月の研究部門
災害救援技術部門

お話を伺った人
宮田 昭さん
災害救護研究所 客員研究員
元・熊本赤十字病院 副院長

救いに行っても間に合わない――私は、複数の災害で救護班として活動し、災害の報を受けてから動く救護活動の限界を感じました。災害発生直後に失われる命を救うにはどうしたらいいか。東日本大震災のさまざまな報告を検証する中で気づいたのは、大切な人を探したり連絡を取ろうとしたりすることで避難が遅れてしまう人の多さです。その一方で、**助かった人は「率先避難」で津波の被害を免れたことが分かりました。**中学生たちが避難しながら大声で呼びかけ続けたことで周辺住民の多くの命が救われた“釜石の出来事”のように、率先避難をする姿は、見た人の行動にも影響を与えます。災害が起きた瞬間に命を守る行動ができるのは、そこにいる被災者本人。私は医師としての領域を超えて、他の研究者たちと**「安否確認を支援するコミュニケーションアプリ」**の開発に取り組んできました。これは、自分がこれから避難することを、家族や職場の人などに伝えることで安否情報を共有するシステムです。これにより、メッセージを送った相手にも、身を守る行動を促す効果が期待されます。今年、沖縄県那覇市とLINEヤフーコミュニケーションズが実施するオンライン防災訓練では、このシステムを用いた安否確認支援がシナリオに組み込まれており、私が所属する部門で技術支援と監修をしています。**災害が起きたら、とにかく早く自分自身の安全確保に集中できる仕組みを社会に広めたい**です。

また、インフラが破壊された中でも災害医療を行うための資機材開発も行ってきましたが、重要なのは、被災地の人がその設備を使い慣れているかどうか。日常で使い慣れていなければ使いこなせません。その開発事例の一つが、完全自己処理型水洗トイレ「トワイレ」です。トワイレは、水洗された排泄物を微生物が分解し、洗浄水を再生成する処理システムを備えた上下水道が不要な水洗トイレです。私たちは、このトイレを災害時に防災拠点として活用される公共施設で普段使いすることを提案し、開発を進めてきました。昨年、国土交通省により福岡県の防災道の駅に導入されたトワイレは、能登半島地震の被災地でも活躍しました。10年20年に一度あるかないか、という大災害のときにしか使用しない設備やシステムではなく、**日常的に使用するもので万一に備える、という「フェーズフリー」の発想は、医療支援だけでなく、あらゆる人にとって大変有用**だと思います。

※災害の種類によっては安全確保のため屋内待機や在宅避難が必要な場合もあります

献血ハートフルストーリー vol.8

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

命を救うための、“つなぎ役”

＊赤血球がこわれて、中身のヘモグロビンが外にでる現象

今月のひと

profile
福岡県赤十字血液センター
学術情報・供給課
原田（はらだ） 滉（あきら）さん

私は病院で輸血する際に必要となる血液製剤の情報提供を担当しています。言ってみれば**血液センターと病院の「つなぎ役」**。具体的には、病院で持っている試薬では輸血を必要としている患者さんの血液型や「不規則抗体（赤血球に対する抗体のうちABO式血液型の抗A抗体、抗B抗体以外の抗体）」の有無が特定できないときに、血液センターで患者さんの血液を調べるためにお預かりし、病院に検査結果を提供するなどしています。血液型が判明しないというのは、特殊な血液型である場合もありますが、投与されている薬の影響で判別が難しくなっているケースも多いです。また、**「不規則抗体」の検査は「溶血（とけつこ）＊」などの副作用を防ぐために欠かせません。**当センターでは、福岡や北九州地区を併せて約500の医療施設に対応していて、月に2、3件ほど血液型の検査の依頼があります。その他、まさに今対応している案件が、他県からドクターヘリで福岡に運ばれてくる患者さんの、心臓移植手術。大量の輸血を必要とするので、病院に出向いて手術内容について聞き取りをします。このように、血液製剤がどのくらい必要か、治療や手術計画のお手伝いをすることもあります。

こんな専門的な業務を担当していますが、実は私は、医療とは無関係の大学出身。**学生時代に東日本大震災で救護活動をする日赤の姿に感銘を受けて入職**しました。最初の配属が福岡県内の赤十字病院、その後、現職に異動。正直、何年たっても学びと研鑽が続いています。最初は、血液製剤を必要とする人の多さと、安定した輸血を実現するための裏側の努力に驚きました。**災害の救護活動でなくても、命を救うことに関わっている、と実感する日々**です。

輸血に慣れていない医療従事者向けに、血液製剤のレクチャーを担当することも（左端が原田さん）

Area News

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

01 TOKAI HOKURIKU 楽しく学ぶ「血育（ちいく）かるた」で子どもたちに向けた献血啓発活動

東海北陸ブロック内の血液センターの若手職員で構成される「みらい＋プロジェクト」では、献血可能年齢に満たない子どもたちにも、献血や体の健康、赤十字について知ってもらうために、「血育かるた」を制作しました。職員から集まった300件以上の読み札アイデアから選定し、裏面には解説を記載。有志で集まった9人の絵札制作者がイラストを描き、完成しました。計600セットがブロック内の血液センターや献血ルーム、近隣の学校などで、未来の献血者育成のための啓発活動に活用されています。

02 TOKYO 映画『じょっぱり－看護の人 花田ミキ』五十嵐匠監督が赤十字情報プラザ来訪

劇中では日赤救護員の制服を再現。写真は花田ミキ役の伊勢佳世さん©stormpictures

1914年に青森県弘前市に生まれ、八戸赤十字病院の看護師として、“青森のナイチンゲール”とも評される花田ミキさんを描いた映画『じょっぱり－看護の人 花田ミキ』。そのメガホンを取った五十嵐匠監督が、赤十字情報プラザの企画展「救い護る人～日赤救護員養成のあゆみ～」*を訪れました。戦災でも震災でも活躍した日赤救護員の記録や明治・大正期の看護師養成の教科書などを鑑賞された後、「花田ミキも命を救うために孤軍奮闘した。大人だけでなく子どもたちにも、花田ミキの生きざまを通して、誰かの役に立つ意味や『人を救う』という思いに触れてもらいたいですね」と語りました。

映画HPはこちらから

＊企画展は赤十字情報プラザにて9月26日まで開催。赤十字WEBミュージアムでは、9月以降も公開予定。

03 ZENKOKU 生きるために逃げるしかなかった「世界難民の日」

6月20日は世界難民の日。日赤はウェビナー「世界の難民と私たち2024」を6月27日に開催。日赤が支援するシリア、バングラデシュ、ウクライナ、パレスチナを中心に世界の難民を取り巻く状況をお伝えしました。生き延びるため、家も財産も失い、厳しい環境で暮らす「難民・避難民」は日本の人口に匹敵する1億2000万人に達すると推定されます。まずは知ることが支援の第一歩。二次元コードのリンク先から当日の様子をご覧ください。

04 SAITAMA 04 KYOTO 子どもの「水の事故」を防ぐために夏休み前に水上安全法講習を開催

行田市立下忍小学校の着衣水泳の様子。「着衣で水に入ると体が重く、無理に動こうとするとバランスを崩すことを学びました」と言った感想が寄せられた

夏休みを前に埼玉県行田市立下忍小学校の全校児童を対象に行われた着衣水泳の授業を、日赤埼玉水上安全奉仕団の指導員が担当しました。子どもたちは、服を着たままプールに入り、その動きにくさや水の抵抗を体験。溺れている人を見つけた際、警察や消防が到着するまで、ペットボトルやランドセルなど身近なものを使うことで助けられることも学びました。

京都府立八幡支援学校では、プール開きを前にした6月12日、府内の教員85人が赤十字水上安全法の指導員3人による講習会に参加しました。水の事故防止や溺れた人の救助方法、一次救命措置まで、実技を中心に2時間にわたって真剣に研修に取り組みました。

また、6月30日には、京都府支部の水上安全法指導員らの働きかけにより、京都踏水会水泳学園の協力のもと、「泳がない水上安全法講習会」を開催しました。この講習は、「溺れない人を増やす」ことを目標に、泳げない方向けに、浮き身の練習などを通して、知識と技術を紹介しました。

（左）「泳がない水上安全法講習会」で浮き身の練習をする児童。（右）京都府立八幡支援学校での講習の様子。救助者同士の手首を互いにつかみ、ヒューマンチェーンを使って溺れている人を救助する練習も

05 SAITAMA 新紙幣のあの人は赤十字と理念一致「渋沢栄ースピリッツ企業」認定

7月3日から発行された新紙幣に肖像が描かれている渋沢栄一。埼玉県深谷市に生まれ、生涯を通じて「忠恕（ちゅうじょ）のこころ（真心と思いやり）」を貫き、「共感の結集が大きな力に変わる」と多くの慈善事業を成しました。今年7月、日赤埼玉県支部は、彼の理念に沿った取り組みを積極的に行う団体として「埼玉県渋沢栄ースピリッツ企業」に認定。実は渋沢氏は日赤の前身・博愛社創設3年目に社員（現在の会員＝寄付者）、その後常議員（現在の理事）になるなど、黎明期から日赤を支えた人物。令和の世に、ご縁が再びつながりました。

06 GUNMA ルーム長は救急法の熱血指導員「もしもの時に救えるように」

6月17日から1週間、太田献血ルームで「心肺蘇生とAED体験会」が実施されました。実は同献血ルームの施設長 須田聖さんは日赤の救急法指導員。止血などの手当ての基本からAEDを使った心肺蘇生法まで学べる赤十字救急法の講師を休日のボランティアで務めています。今回の企画も、須田ルーム長自身が指導を担当。献血に訪れ、実際に胸骨圧迫やAEDの使用体験をした方からは「初めてAEDを触った」「もしもの時に今回の知識を役立てたい」といった声が寄せられました。

07 KAGAWA さあ、救護所を立ち上げよう！合同訓練で養う、災害対応力

6月14日に行われた「令和6年度支部・施設合同救護員実践研修会」に、日赤香川県支部・高松赤十字病院・香川県赤十字血液センターの職員57人が参加しました。この研修は、医師、看護師、主事から成る救護班が、災害現場で的確な救護活動を行うための能力を養うためのものです。職種ごとの研修では、医療職は異なる手法のトリアージを学び、救護所での処置の演習。主事は仮設診療所として「国内型緊急対応ユニット（dERU）」と呼ばれる大型テントや医療設備を設営し、事務業務の確認を行いました。その後救護チームを結成し、各々の役割をシミュレーションで確認した後、傷病者の受け入れ・治療・搬送の実践的な訓練を行いました。

常任理事会開催報告

令和６年７月19日、令和６年度第４回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会では、赤十字・赤新月国際会議等への対応、令和６年度医師の働き方改革関連法施行にかかる医療施設における対応状況について、それぞれ報告しました。

PRESENT!! 被災地のニーズから防災食を開発

パートナー企業 横浜岡田屋 YOKOHAMA OKADAYA CO.,LTD.

能登半島地震では、厳しい避難生活を送られている方々に「少しでもおいしいごはんを」という思いで、被災地へ自社製品の防災食を届けた

1890年（明治23年）の創業以来、呉服屋からショッピングセンター（SC）の開発まで事業を拡大し、現在は都市型SC「MORE'S」を運営している横浜岡田屋。神奈川エリアを中心に地域の人々のニーズに合わせたサービスを展開しています。自社で防災グッズ専用の販売サイトを立ち上げ災害の備えを啓発するほか、企業や学校などからの要望が多い防災備蓄品の提供にも注力し、2017年にはオリジナルの防災食「HOZONHOZON BOSAI SERIES おいしいごはん」を開発。同製品は、東日本大震災の被災者の声をもとに開発された、開けてすぐ食べることのできるレトルト製品です。令和6年能登半島地震では、同製品が被災地へ寄付され、売り上げの一部は日赤へ寄付されています。この他、フードバンクへの寄付やSDGsなどの社会貢献活動にも取り組んでいます。

3名様

HOZONHOZON
和風鯛ごはん6食セット

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS8月号を手にされた場所（例／献血ルーム） ⑥8月号読者アンケートの回答
※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

〈⑥ 8月号読者アンケート〉質問項目

【A】日赤の「会員」ですか
ア. 会員（年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く） **イ.** 会員ではない

【B】赤十字について知っている活動はどれですか ※下記選択から**ア～ケ**の文字をご記載ください。複数選択可
ア. 国内災害救護 **イ.** 国際活動 **ウ.** 赤十字病院 **エ.** 看護師等の教育 **オ.** 献血（血液事業） **カ.** 救急法等の講習 **キ.** 青少年赤十字 **ク.** 赤十字ボランティア **ケ.** 社会福祉

【C】今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか
ア. とても理解が深まった **イ.** ある程度理解が深まった **ウ.** すこし理解が深まった **エ.** 以前と変わらない

【D】興味・関心を持った記事・企画はどれですか
ア. 特集 **イ.** TOPICS **ウ.** 防災ゼミナール **エ.** 献血ハートフルストーリー **オ.** エリアニュース **カ.** プレゼント **キ.** ワールドニュース

【E】赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま **イ.** A4サイズ **ウ.** 小冊子（A5 148×210㎜）サイズ

【F】赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 **イ.** 2カ月に1回 **ウ.** 3カ月に1回 **エ.** 半年に1回

【G】赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン（オンライン）で読みたいですか、いままでどおり紙で読みたいですか
ア. オンライン **イ.** どちらかというとオンライン **ウ.** （オンラインと紙の）両方 **エ.** 紙 **オ.** どちらかというと紙

【H】その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望（任意）

郵送／〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 8月号プレゼント係

WEB応募／下の二次元コードからご応募ください。

8月30日（金）必着

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから

WORLD NEWS

モンゴル国ってどんなところ？

東アジア地域に属する内陸国・モンゴル。国土面積は日本の約4倍であるのに対し、人口は約350万人と、日本の2.8％ほど。大草原や遊牧民といった牧歌的なイメージがある一方で、近年は気象災害や経済不況による貧困、へき地での医療サービス不足などの問題を抱える。

ゾドで苦しむ人々を救うために

1939年に設立されたモンゴル赤十字社（以下、モンゴル赤）は、首都ウランバートルの本社と33の支部を拠点に、全土で災害救護や保健支援をはじめ、地域のさまざまなニーズに対応する活動を続けています。今回は、「ゾド」と呼ばれる大規模な冷害・雪害に苦しむ人々を支え、モンゴル赤の“災害に立ち向かえる組織力”を強化するため、日赤が行う支援事業を報告します。

「広大な大地の隅々まで支援を届けるために」求められる組織力強化

近年、モンゴルでは気象災害の頻度が増加し、過去20年間でその発生件数は2倍になったと言われています。人口が密集する首都ウランバートルでは、2023年に数十年ぶりの大規模な洪水被害がありました。被害が拡大した原因のひとつには、生業を失った遊牧民の移住などによる急激な人口増加とその半数以上がゲル地区（テントなどの移動式住居や簡易住居が集中する地区）や洪水リスクの高い地域に暮らさざるを得ない状況であることが挙げられます。また、特に**2015年以降は夏の干ばつに続いて豪雪や氷点下40℃以下の極寒の冬が訪れる「ゾド」と呼ばれるモンゴル特有の自然災害が頻発しています。**

このような現状に立ち向かい、広大な国土において、必要な支援を迅速かつ継続的に届けるために、モンゴル赤は、支部体制を強化するための事業に取り組んできました。

日赤は、2015年から2019年にかけて、各支部において活動資金（寄付）の調達や事業の運営・管理を自力で行えるようにする活動を支援してきました。例えば、**2016年には、ウランバートル内の支部に縫製設備を整備して、そこで救援セットを入れるポーチを作成・販売し、支部の収入とする仕組みを構築しました。**

急務とされるゾド対応 日赤から緊急対応要員を派遣

モンゴル赤は、毎年のように起こるゾドに備えてあらゆる準備を進めていますが、今回は予想を上回る状況に対応が追いつかず、今年3月には「緊急救援アピール」を発出し国際社会に広く支援を呼びかけました。これを受けて日赤は、500万円の資金援助に加え、衛生用品セットの寄贈を行ったほか、日本赤十字社医療センターの職員・宮本教子さんを、国際赤十字・赤新月社連盟の緊急対応コーディネーターとして派遣しました。支部のスタッフやボランティアが、心理社会的支援＝「こころのケア」の考え方を基に、気象災害で苦しむ人々に寄り添った声がけや支援ができるように手助けをするのが役割です。モンゴル西部のアルハンガイ県とザブハン県の遊牧民の家族を訪ねた印象を、宮本さんはこう語ります。

「一人一人のお話からは、気候的に厳しい地域に住んでいる人々の、自然の驚異を受容しながら生きていくたくましさを感じました。『家族や親せきで困ったことがあったら助け合います』『天気の良い中、羊の世話をしていると落ち着いてきます』といった声を聞く中で、自分たちの家族や親せきとのつながりはもちろん、家族同然の家畜の世話をすることが心の安定につながってくるのだと感じました。このような、**自分たちがもともと持っているつながりや結びつきを生かして、厳しい状況に向き合っているのだと思います**」

家族のように大切にしてきた家畜が厳しいゾドの影響で亡くなってしまうことで、人々の精神的負担にもつながり、慢性疲労や睡眠障害、不安障害、アルコール摂取増などのストレス反応を見せる住民も多くいます。宮本さんはその現状を知り、スタッフやボランティアに向けて、被災者支援をする人が知っておくべきサイコロジカル・ファーストエイド（PFA）についての研修を行いました。6月中旬に洪水の被災地に駆けつけて支援を行ったスタッフが、「PFA研修を受けていたから、ストレスを抱える被災者にも自信を持って対応できた」と語るなど、着実に対応力が身についています。

日赤による支援は新たな局面へ 3カ年の保健支援事業を開始

また、今年度から恒常化・深刻化する災害への対応を迫られるモンゴル赤の組織強化のため、日赤による3カ年の保健支援事業を開始しました。今回の支援では、救急法の普及と「こころのケア」活動のガイドラインや研修体系の整備に取り組みます。**3年後に目指すのは、モンゴル赤の全33支部で質の高い救急法講習を提供できる体制を整備すること、また、職員やボランティア一体となって、「こころのケア」を人々のニーズに応じて提供できるようになることです。**自然災害によって困窮・孤立する人々やへき地医療サービスの不足により命と健康が脅かされる人々への対応は、同国の最優先課題の一つです。モンゴル赤が遊牧民を含め、社会的に弱い立場にある人々に率先して支援を届ける姿勢は、地元の信頼を集めています。日赤は、これまで国内で培った救急法や「こころのケア」の知見など総合力を発揮しながら、この取り組みを支えていきます。

放牧地を襲ったゾドの影響で昨年11月から今年6月までに家畜約790万頭が失われた ©IFRC

モンゴルの遊牧民の住居「ゲル」の中で家族から話を聞く宮本さん（右）

モンゴル赤十字社の支部スタッフやボランティアを対象にPFAの研修を実施